イモムシ・ケムシは、育てて観察しよう！

野山を歩くと、さまざまなイモムシやケムシに出会いますが、そのほとんどは、ガの幼虫です。チョウとガは同じグループ（チョウ目）の昆虫ですが、日本のチョウは、およそ250種なのに対して、ガは、5千種以上いるのですから当然です。ガの幼虫には、ふしぎな姿やユニークな動きのものが多く、飼育して成長を観察することで、楽しい発見があります。自分で育てて、どんな成虫になるのかを見届けましょう。

用意するもの

アルミホイル
キッチンペーパー・ティッシュ
＊飼育ケースの中に入れて使う。

＋

プラケース
＊透明や半透明のものを選ぶ。食品保存用のプラケースは、重ねて置くことができるので便利。

＋

チャック付き袋
＊幼虫が食べる植物の保存に使う。さまざまな大きさのものを用意すると便利。

one point

食草をあたえて育て、どんな成虫になるのかを自分の目で見届けましょう。

幼虫が食べる食草（木の場合は食樹ともいう）を知らないと、飼育することはできません。まずは図鑑で幼虫と、その食草について調べましょう。正体不明の幼虫でも、そばに食べたあとのある植物があればそれが食草です。成虫まで育てれば、名前を調べる大きな手がかりになります。

アケビの葉を食べるアケビコノハの幼虫。

飼育方法

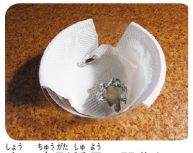
空気穴は必要ない（食草のかんそうを防ぐ）。

①フンなどのそうじがしやすいように、プラケースにキッチンペーパー（ティッシュでもよい）をしきます。食草のしんせんさを保つため、ぬらしたティッシュで茎の切れ目を包み、さらにアルミホイルでくるみます。

②食草は多めに採集しておき、チャック付き袋に入れて冷蔵庫（できれば野菜室）で保管します。食草をむだにしないために、採集した日付をきちんと記録して、古いものから使うようにします。

③さなぎになったら、プラケースの底と横にキッチンペーパーをはわせ、羽化した成虫がよじのぼり、はねをのばせる場所を作ります。さなぎはケースの底にそっと転がしておけば大丈夫ですが、転がるのを防ぐため、アルミホイルでさなぎを軽くくるみ「蛹室」を作ってもよいでしょう。冬場はかんそうしすぎないように、軽くしめらせたティッシュをケース内に置きます。

採集した日付の記録を忘れずに。



小・中型種用の羽化ケース。

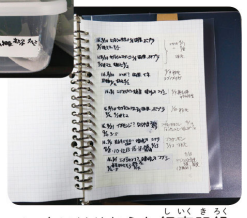
大型種用の羽化ケース。ケース横に、植木鉢の底にしくあみをはるとよい。

one point

記録が大切

飼育ケースに、白いビニールテープをはり、幼虫を採集したときのデータや、飼育中の記録などをペンで書きこみましょう。飼育後、テープをノートにはりかえて記録すれば、飼育テクニックの上達につながるだけでなく、調査や研究にも活用することができます。

飼育記録をはった飼育ケース。



ノートにはりかえた飼育記録。

飼育って本当にいいものです！　家の中ででも、野外でもなかなか経験できないレベルの驚きや発見を味わえるのですから。とくにイモムシ・ケムシは超オススメです。なぜって、「変態」が十二分に観察できるからです！　（奥山）

◆自然を調べるプロのスゴ技にチャレンジ！　特別配信版（期間限定）／少年写真新聞社
『100円グッズと身近な道具でできる！ 博物館のプロのスゴ技で自然を調べよう ②観察と調査』
小川誠・奥山清市・矢野真志／共著（西日本自然誌系博物館ネットワーク）p.22-23より
※このシートは、非商業的な利用に限り使用を許諾します。　©小川誠・奥山清市・矢野真志